

日本女子大学文学部・大学院文学研究科学術交流企画

「暗闇のなかの希望」

ジョージ・オーウェル生誕 120 周年記念イベント

日時：2023 年 3 月 11 日 (土) 13:20～17:50

(12:50 より受付開始 要予約)

場所：日本女子大学目白キャンパス
新泉山館 1 階大会議室

共催：レイモンド・ウィリアムズ研究会

登壇者：

小川公代

小田島恒志

川端康雄

河野真太郎

佐藤和哉

秦 邦生

鈴木アツト

滝沢花野

中村麻美

星野真志

【参加申込】「暗闇のなかの希望」——
ジョージ・オーウェル生誕120周年記念イ
ベント



(申し込みフォーム)

<https://forms.office.com/r/ngSVYE22ni>

執筆中のオーウェル、1939年、モロッコ、マラケシュにて

イベント趣旨

現代世界のさまざまな問題が議論される際に、イギリスの作家ジョージ・オーウェルが援用・言及されることがとみに多くなっている。1903年に生れ、2度の世界大戦、また冷戦の初期の時代に生きて1950年に没したオーウェルは、Orwellian という語が辞書の見出し語に入るほどその名が知られている。その形容詞は、『一九八四年』の世界風(組織化され人間性を失った)と英和辞典の語義説明にあるとおり、オーウェルが警鐘を鳴らした政治状況を表現する語として一般化されている。その結果、オーウェルその人は未来世界に絶望したディストピア小説の著者というイメージが定着し、それがいまも抜き難くある。

たしかに21世紀に入って以後、先の戦前・戦中の暗い時代が回帰しつつある、あるいはすでに迎えているのではないか——そう思わずにはいられないような、民主主義の後退を示す動きが国内外で多く出来ている。そんな状況であるからこそオーウェルがさかんに言及されている、といえるのかもしれない。

とはいえ、暗い未来図のなかで絶望にとらわれていた作家というオーウェル像は、彼の仕事全体をよく吟味してみれば、糺されるべき大きな誤解であることがわかる。この点での見直しを試みたレベッカ・ソルニットは、『オーウェルの薔薇』(Orwell's Roses, 2021; 川端康雄・ハーン小路恭子訳、岩波書店、2022年)のなかで、植樹をするオーウェル、ガーデニングに打ち込むオーウェルの日常生活に注目し、そこから未来にむけての彼の希望の身ぶりを論じたのだった。そのソルニットの旧著『暗闇のなかの希望』(Hope in the Dark, 2004; 井上利男訳、七つ森書館、2005年)のタイトルを借りて、本イベントの主題とする。

この学術交流企画は、2019年3月におこなった「オーウェル『一九八四年』とディストピアのリアル——刊行70周年記念シンポジウム」を引き継ぐかたちで、オーウェル生誕120年を記念して、オーウェル像の再検討を図ることを狙いとする。その際、上記のソルニットの著作とともに、レイモンド・ウィリアムズ著『オーウェル』(Orwell, 1971; 秦邦生訳、月曜社、2022年)がもうひとつのキー・テキストとなるだろう。

プログラム(敬称略)

開会挨拶:佐藤和哉(日本女子大学教授・文学部長)(13:20~13:25)

第一部(13:25~14:15) トークセッション:劇団印象-indian elephant-公演『ジョージ・オーウェル~沈黙の声~』(2022)とオーウェル世界の舞台化をめぐる

登壇者:鈴木アツ(劇作家・演出家)、小田島恒志(翻訳家、早稲田大学教授)、滝沢花野(俳優)

第二部(14:15~15:00) 「『動物農場』のBBCラジオ脚色版をめぐる」オーウェル自身による放送用台本『動物農場』の紹介と抜粋の朗読

登壇者:滝沢花野、川端康雄(日本女子大学教授)

第三部(15:15~17:45) シンポジウム「オーウェルと『暗闇のなかの希望』」

登壇者:小川公代(上智大学)、川端康雄、河野真太郎(専修大学教授)、秦邦生(東京大学准教授)、中村麻美(立教大学助教)、星野真志(日本女子大学非常勤講師)

閉会の辞:川端康雄(17:45~17:50)

備考:新型コロナウイルスの流行の状況によってはリモート開催に変更する可能性があります。

日本女子大学 〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

[kou008-campus-map-mejiro.ai\(jwu.ac.jp\)](http://kou008-campus-map.mejiro.ai(jwu.ac.jp))

